

社会問題と生活史分析

——ミルズ知識社会学の方法論的再検討——

伊 奈 正 人

一、問題の所在

多くの問題を生み出しているモダンソサイエティあるいはモダンサイエンスに対する反省を志向する試みは数多く、そこでは様々な方法が提示されている。曰く方法としての現象学・人類学・民俗学・社会史等々。そしてまた社会学における生活史研究もそうした試みの一つとして定位されよう。しかしまたそこには、その存立意義・理論枠組と関連して幾多の方法論的・理論的問題がある。水野節夫はそれを次の二点に要約している⁽¹⁾。(1)、「過去」をおいかけるばかりでなく「未来」に開かれたものとしてそれを位置づけること。(2)、様々な生活研究をレビューすることにより、研究法・概念・枠組等を標準化すること。現在かような問題意識に立った研究成果としてこれまでの生活史研究史のレビュー、個々の研究の実質的再検討等がなされてきている⁽²⁾。

ライト・ミルズの社会学方法論・理論、それをつらぬく知識社会的視点の批判的再検討は、こうした問題を考えるのに、好素材を提供してくれるように思われる。「生活史研究の課題」という論文の冒頭で桜井厚は次のように言う⁽³⁾。現代社会学の諸潮流を批判したミルズの「依って立つ基盤は今日のわれわれの生活史研究のそれと直接に重なっているとはいえないが、個人史と歴史と社会を準拠点とする人間研究の可能性を求めようとする立場において共通する。ミルズの問題意識の延長線上に今日の生活史研究の関心が交錯していることは間違いないところであろう。」(傍点筆者) 今日ミルズ社会学の実質的再検討がせまられているということはいえそうである。

本稿は以上の問題意識に立ち再検討を行なうことを目的とする。あくまでも一つのライト・ミルズ研究ではあるけれども、上の「交錯」の一端でも解明できればと思われる。その意味で課題を、生活史研究の位置づけをめぐる方法論

の側面に限定し、理論的枠組等については後の課題としたい。

(注)

- (1) 1982年度関東社会学会大会シンポジウム席上での発言。
- (2) 桜井厚「社会学における生活史研究」『南山短大紀要』No.10 水野節夫「初期トーマスの基本視座」『社会労働研究』Vol.25 No.3・4 同『『ポーランド農民』の実質的検討に向けて』『同』Vol.26 No.2 1979 中野卓「個人の社会学的調査研究について」『社会学評論』125. 1981等々。
- (3) 桜井厚「生活史研究の課題」トーマス・W,ズナニエッキ・F『生活史の社会学』1983

二、ライト・ミルズの知識社会学

バーガー・ルックマンに代表されるように、ミルズの知識社会学を初期に限定し、否定的評価しか与えない見解もある⁽¹⁾しかし本稿ではむしろ上記の問題意識に立ち、彼の知識社会学の反省的性格が、後の仕事においても核心として維持され、多様な具体的展開をみたという、ホロヴィッツ的見地をとりたい⁽²⁾。これにしたがって見るならば「社会学的想像力」は、この核心の方法論的展開としてみなされる。この節ではこれを裏づけるため、彼の知識社会学について整理し、評価をくわえておくことにする。

1. 初期知識社会学の二つの領域

(α)、日常的社会意識の社会学：そこでミルズはヨーロッパの知識社会学、とりわけマンハイムの問題提起——意識の存在被拘束性、相關主義——を継承しつつも、その思弁性を批判した。そして彼はプラグマティズムの社会心理学を援用することにより、知識社会学の経験科学化をはかった。そこで彼が提出したのは、ミード的理想主義脱却のため、個人によって選択される社会の部分として修正された「一般化された他者」概念⁽³⁾およびデューイの状況—行為図式、モリスの言語分析、ウェーバーの「行為の動機的理解」を融合した「動機の語彙」概念である⁽⁴⁾。こうして彼は思考が何に準拠し、個人がそれをどう選択しているか、それをあらかず概念を開発し、さらにそれを思考と行為という地平へ展開した。

(β)、科学の社会学： α はさらにこの領域へ展開された。そこでは科学的思考でさえ、社会によって枠づけられるものとされ、それを経験科学的に解明するため、科学的思考が準拠するものが概念化された。——「検証モデル」

「科学的語彙」「パラダイム」。そして科学者は自らの方法的前提を自覚すること必要であり、そのためには知識社会学的観点、不可欠なものであるとされた。こうしてここでの主張の骨子は、スパイヤーら当時の科学主義的見解を批判し、知識社会学を十分に方法論的関連をもつものとして位置づけることにあった。⁽⁵⁾

2. ミルズ知識社会学の展開

(α')、社会心理学： α はここへと展開された。上記のようにプラグマティズムに大きく影響されながらも、理論的修正を加えたミルズだが、彼はさらにそれを歴史的文脈からあとづける。プラグマティズムは共同社会の解体とその再組織化を問題とする。しかしその見地は、歴史によってのりこえられた過去への憧憬を含み、社会性と共同社会の同質性を無反省に同一視するものである。そう彼は批判し、「古典的社会科学」の立場に移行した。⁽⁶⁾ そんなミルズに大きなインパクトを与えたのがアメリカの第二次大戦参戦である。それを契機として不況は解消され、他方で転向があいついだ。そしてそれはヨーロッパの窮状とその反映たる非合理的行為論と共鳴し、「不況一戦争一好況」というアメリカ史のリズム、軍国恒久化の予兆を彼に感じせしめた。そして彼は次のような問題意識を醸成させてゆく。いまや世界の鍵をにぎるアメリカの行動を決定しているものは何か。そこで人々の思考はどのように枠づけられているか。その経験科学的解明をねらったのが階級三部作である。⁽⁷⁾ この研究過程でミルズは、ウェーバーの階級論、「社会的性格」「基本的不安」「意味ある他者」等新フロイト主義の諸概念を摂取し、性格と社会構造モデルを完成した。⁽⁸⁾ そしてミルズは冷戦を境とする労働運動の沈退を背景として、エリート・マス図式にもとづいた大衆社会論を展開するに至る。そこでミルズが批判したのは思考が準拠する動機の語彙の分節的な画一化、一方で理想的民主社会アメリカ（自由、理性、多様性）、他方で民主主義の敵ソ連というステレオタイプ蔓延による社会問題の解消という事態であった。

(β')、社会学の社会学：こうした機制にとりこまれていることは文化装置の公分母たる社会学とて例外ではなかった。社会学者の記号環境は分節的に画一化され、科学的思考も画一化される。がために社会学者は自らの方法的前提を見失ない、ステレオタイプ蔓延を助長し、ひいては重要な社会問題を解消せしめている。⁽⁹⁾ 40年代中葉の社会病理学批判、50年代前半からの現代社会学の諸

潮流の解明⁽¹⁰⁾、さらには『社会学的想像力』における社会学批判をとおして、ミルズはこれらの論点をかためていった。—— β の展開。

3. 社会学的想像力

こうした現実分析が明らかにした現代人の自己意識の非生産性。社会学的想像力はそれへのアンチテーゼとして提出された。それは個人と社会、個人史と歴史等々を媒介し、確固たる事実の世界におけるイメージ形成を行なう精神の資質。それにより自らの方法的前提、自らの思考が準拠するものの⁽¹¹⁾自覚、反省を促し、社会問題の批判的対象化とその徹底解決をはかる最も生産的な自己意識である。⁽¹¹⁾逆に言うと社会学者が自己の歴史的使命を果たすためには、自らの方法的前提の自覚、反省が不可欠なのだが、上記の如き機制はたらく社会にあって、それをなすには分節化された個的立場を越え出て虚像を払拭し、社会と自己を媒介する、そして実像を形成する社会学的想像力が不可欠ということになる。こうして社会学的想像力はミルズ知識社会学の方法論的帰結として定位される。

4. 評価

さて以上の整理をふまえ、社会学的想像力に帰結するミルズ知識社会学について評価をくわえておきたい。まずは積極面について。第一にミード的な反省的知性の変質をあとづけ、自覚的・自己批判的媒介作用という再定式化が読みとれる点。これは一般化された他者概念の修正、プラグマティズム批判、社会学批判に体现されている彼独自のヒューマニズムからうかがえるであろう。第二に自己超越的媒介契機として想像力を提出している点。第三に社会学の自己反省、「新しい社会学」の構想という動向を導出した点。——以上の評価において分節化された社会における、反省、想像力という二契機が析出されたことになる。

次に消極面についてであるが、ひとつには理想的想像力とステレオタイプの絶対的対立、あるいは理想と現実の二分法の絶対化ということがあげられる。そしてそれがゆえに理想的科学による大衆の啓蒙という図式がエリート主義的に固定化されることになる。しかしそれでは批判をになう主体の問題、それを具現化する計画の問題との現実的・客観的関連がつかなくなってしまう。これが第二の点である。これは多くの批判理論共通の欠点とも言えるであろう。以下では上記の批判点・評価点を具体的に敷衍しつつも、批判的打開をめざしたいと思う。

(注)

- (1) Berger, P.& Luckmann, T. *The Social Construction of Reality* 1966.
- (2) Horowitz, I.L. "An Introduction to C. Wright Mills" Horowitz eds, *Power Politics and People: The Collected Essays of C. Wright Mills* 1963 (以下P.P.P.)
- (3) Mills, C.W. "Language Logic and Culture" 1939 P.P.P. p.p. 423 - 438
- (4) Mills, C.W. "Situated Action and Vocabularies of Motive" 1940 P.P.P. p.p. 439-452
- (5) Mills, C.W. "Methodological Consequences of the Sociology of Knowledge" 1940 P.P.P. p.p.453-468
- (6) Mills, C.W. *A Sociological Account of Pragmatism* 1942 (以下S. P.)
- (7) Mills, C.W. *The New Men of Power* 1948 *White Collar* 1951 (以下W.C.) *The Power Elite* 1956 (以下P.E.) 尚 Gillam, R. *The Intellectual As Rebel: C. Wright Mills 1916-1946* unpublished MA essay Columbia Univ. 1966 Gillam, "C. Wright Mills and Politics of Truth: *The Power Elite* Revised" *American Quarterly* 1975 Gillam "Richard Hofstadter, C. Wright Mills and the Critical Ideal" *American Scholar* Win. 1977-1978 Gillam, "White Collar From Start of Finish" *Theory and Society* Jan. 1981 等も参照。
- (8) Jones, R.P. *The Fixing of Social Belief: The Sociology of C. Wright Mills* Ph.D Dissertation Univ. of Missouri-Columbia 1977およびGillam 1981 op. cit. 等を参照。日本ではこの書と階級三部作の断絶を指摘する見解も散見されるが、これら詳細な資料に立脚した研究は、この書の40年代初頭からの出版計画の存在、階級三部作の分析枠組としての性格等を示し、その点を否定している。
- (9) Mills, C.W. "Professional Ideology of Social Pathologists" 1943 P.P.P. p.p. 525-552
- (10) Mills, C.W. "Two Styles of Social Science Research" 1953 P. P.P. p.p. 553 - 567 Mills "IBM Plus Reality Plus Humanism = Sociology" 1954 P.P.P. p.p. 568-576
- (11) Mills, C.W. *The Sociological Imagination* 1959 (以下SI) p.p.3-24 および拙稿「『科学』フェティシズムと創造的想像力」『一橋研究』Vol. 7 No. 1 1982参照。

三、ミルズにおける反省的視座

まずはミルズにおける反省的視座についての話からはじめることにしよう。

ミルズはその学問的営為において、アメリカで自明と思われていたもの、偏見、ステレオタイプへの反省を積み重ねていったと見ることができる。(1)、まず最初に彼がプラグマティズムのノスタルジックな理想主義を批判し、古典的社会科学の立場に立ったこと。(2)、次に転向と冷戦、そしてコンフォーミズムの4・50年代にあって、アメリカ的理想に挑戦し、人間の立場に立ち、戦争を重大問題として対象化したこと。(3)、さらにその問題が国際社会にまでひろがりをもせたときも、かくなる立場を維持しえたこと。(4)、最後に自らの立脚点でもある社会学への反省をくわえたこと。これらのことからそれはうかがえるであろう。そしてミルズはアンチテーゼとして想像力を提出した。すなわち大衆社会的状況に対して反抗的想像力を、社会学の閉塞状況に対しては社会学的想像力を提出したわけである。もっとも前者は明確な定式化がなされるまでには至らず、後者に吸収されてしまったわけであるけれども。このようにミルズは個人の全体性喪失という事態を反省・自覚し、かつての反省的知性を批判的に限定、さらに歴史的全体社会と個人を媒介するものとして想像力を提出したわけである。

こうしてミルズの反省的パースペクティブ、プロブレマティックは段階的に拡大されていったわけであるけれども、それが世界史的ひろがりをもつに至るのは、第三次大戦の原因解明においてである。ミルズはそこで大戦の直接的原因として「非難の均衡」という事態をあげた。それは一言で言ってしまうば、一方で理想的民主社会アメリカ対民主主義の敵ソ連、他方で人民の敵アメリカ対社会主義ソビエトという図式が固定化されているということである。ミルズはこうした「敵」を利用した社会集団形成のあり方、それを推進する東西権力エリートが無責任を批判した。(3)そして平和勢力の擡頭に目をむけた。(4)

しかしT、ヘイデンや高橋徹も指摘するように、そこにはアメリカ国内に潜在する未開発の「貧困層」を見ずえてゆく視座が欠落していた。がために一方で新左翼を観念的に形成し、他方で国外平和勢力のもり上がりにとびつくことになったのである。(5)こうしたミルズの視座の問題点を論理的につめると次のことが指摘できる。すなわち彼の批判が、一定の理想態の措定による現実の頭ごなしの批判であること。したがって観念的に形成された理想態、たとえば人間の科学等、にもとづく啓蒙図式が不可避であること。はたしてホロヴィッツは啓蒙主義者ミルズを賞揚している。(6)(7)(8)

ともかくもこの一種の二項対立図式に、アメリカ的理想、すなわち自由・理

性・多様性・自律性，さらには問題解決の想像力がはやりこんでくることになる。ミルズを評してJ・エルドリッジが「スモール・イズ・ビューティフル」の信奉者と言⁽⁹⁾い、H・プレスが最もアメリカ的なアメリカ批判者と言⁽¹⁰⁾うゆえんである。そしてまたこの点においてベシミスト，よりどころのない立場という従来の評価⁽¹¹⁾が一定妥当すると言えよう。これを打開するためには，客観的・歴史的文脈からの発生的分析を徹底すること，批判対象たる社会集団形成の論理を解明すること。そしてそこから理論的に主体形成を考察する社会科学的実践性を追求することが必要となる。

ミルズの視座はそうした方途にとざされたものであろうか。答は否である。——ミルズはプラグマティズム批判，大衆社会批判，社会学批判等において一貫して歴史的・構造的な文脈を重視した。現代人の意識・運命を，分業の進展と社会の分節化，官僚主義化，支配的価値の形成・形骸化という大衆社会化の過程，およびその帰属する社会階層とのかかわりで考察しようとした⁽¹²⁾。そして戦争という現代社会の重大問題の窮極的原因を，20世紀世界史形成の論理の中に見す⁽¹³⁾え，それを解明すべく「国際比較社会学」を構想した。こうした発生的分析視角に上記実践性が看取されるのは否定できないであろう。これにくわえるに次のことがあげられる。上でものべたようにミルズは平和の問題を敵の問題に解消するのを批判した。そして戦争と平和の問題の根底的解明と，平和勢力の形成をめざしていた。こうしたミルズの営為の中に社会問題の解決をつうじた社会集団形成の論理の探求という含意を読みとることができるように思われる。この点を第二の積極的要素として評価しておく。

さてこうした積極面の充全なる展開こそがめざされなければならない。その作業は社会問題の解決を根底にすえ，上で言った意味での社会科学的実践性を探求することとして概括できよう。これはホロヴィッツが，ファンダメンタルなプラグマティズムとよぶ⁽¹⁴⁾，ミルズの社会科学的プラグマティズムを，社会問題論として再生する試みともみなしうるのであろう。

(注)

- (1) くわしくは拙稿『反省と想像力』1982（一橋大学修士論文）第Ⅱ部を参照。
- (2) Mills, C.W. "Who Conforms and Who Dissents" *Commentary* Vol. 17 No.4 April 1954
- (3) Mills, C.W. *The Causes of World War Three* 1958 および Mills "The Balance of Blame: Further Note on the Strategic Causes of

- World War Three" *The Nation* June 18 1960
- (4) 高橋徹「アメリカの新左翼とは何か——転換期における知識人」『世界』254
1967 1.
- (5) Mills, C.W. "Letter to the New Left" *New Left Review* No.5
(Sept. - Oct.) 1960
- (6) Howe, I. "On the Career and Example of C. Wright Mills" *Howe
Steady Work* 1964
- (7) 啓蒙主義の理解は次の論文において。佐藤春吉「『啓蒙主義』批判とマルク
ス——フオイエルバッハターゼを手がかりとして——」岩崎允胤編『科学の方法と
社会認識』1979
- (8) Horowitz, I.L. "The Sociological Imagination of C. Wright
Mills: in Memoriam" *The American Journal of Sociology* Vol. LXV
III No 1 1962
- (9) Eldridge, J. C. *Wright Mills* 1983 chap. 1.
- (10) Press, H. C. *Wright Mills* 1978 p. 13
- (11) Aptheker, H. *The World of C. Wright Mills* 1960他
- (12) S.P., S.I., W.C. など。
- (13) Mills, "The Balance of Blame" op. cit.
- (14) Horowitz, I.L. "The Intellectual Genesis of C. Wright Mills"
Mills Sociology and Pragmatism 1963.

四、社会問題定位の論理

そこで社会問題の理論的考察という課題に逢着することになる。ここではミルズをめぐる文脈にそいつつ、社会問題定位の論理について検討をくわえることにする。

(1)、当時のアメリカでは、後にD・ベルが指摘するに至る「イデオロギーの終焉」という風潮を背景として、テクノクラートによる「問題解決行動」⁽²⁾が擡頭していた。ここには問題に対する「漸進的」「科学的」「計画的」対応への志向がよみとれる。社会学においても、こうした動向と対応して、論理—演繹的、経験批判的な社会学、すなわち構造機能主義と大規模数理調査が圧倒的影響力をもつに至る。なかでも一般理論を志向するパーソンズが明示した論理、「分析的リアリズム」⁽³⁾は、アレクサンダーも指摘するように、⁽⁴⁾「実証主義」の伝統の中で、「認識論的」貢献をなしうるものであることは否定できぬ。「価値」とのかかわりで考えるならば、これはクラックホーン的に「パターン」としてそれを把握する論理⁽⁵⁾であり、また「共通価値」をまずもって把握し、そこから社会の構成・統一をシステムティックに説明しようとする論理⁽⁶⁾である。し

かしそこで支配的「共通価値」が固定化され、システムティックな実現がはかれるとき、社会問題は一定の体制を立脚点とし、支配的価値をおびやかすがゆえに統合さるべき「社会病理」として定位されることになる。

(2)、ミルズは科学の技術主義化、歴史にのりこえられた理想の固定化・形骸化、社会問題の画一化等の文脈を解明しつつ、これを社会問題解消の論理、一つの職業イデオロギーとして批判した。⁽⁷⁾

彼の論理を「価値」とのかかわりでみてみよう。ミルズの「価値」に対するアプローチは、上でのべたパーソンズとはまったく逆に、「制度的秩序のひとつひとつのシンボル局面をしらべる」⁽⁸⁾ことにより、支配的シンボル、制度的秩序の正統性を検討し、「そこから価値を概念化してゆくやり方」⁽⁹⁾である。パーソンズが上記の重要な見地を提出するにあたり展開したトーマス批判が、ミルズにも妥当するか、仮に妥当するとしてその評価をどうするか、それは両者がともに依拠するウェーバーを介在させて行為論的吟味をほどかさねばわからない問題である。この点は本稿の課題外であるのでひとまずおくとする。だがこの視角がミルズに「共通価値」の相対化・対象化を可能ならしめたということは言えるであろう。さらに言えばこの見地は、彼が継承したミード的コミュニケーション論を基礎に、制度的秩序ないし合意形成のメカニズムを解明する理論を展開する可能性をも含みこんでいたように思われる。とすればそれはミルズの発生的分析に、より豊かな成果をもたらすはずであった。

こうした視座は40年代、世界戦争という問題の社会科学的解明をめざして、ミルズが階級三部作を構想し、分析をすすめてゆく過程で、明示的に定式化されていたものである。すでにのべたようにこの反省的視座は、自由主義対共産主義という二分法の対象化を、そして戦争を「敵」の問題に解消することに対する批判を、可能ならしめた。しかし状況のあまりの閉塞性は、彼の議論を過度に論争的なものにした。彼の発生的分析視角も、ひとまずは独白的想像力としてスローガン化を余儀なくされた。その議論に道徳主義が影をおとす。ミルズの論理はかくして、窮極的には、抽象的人間概念に立脚点をもつに至る。そこでは一定の理想態・理想郷に立脚し、そこからの乖離として社会問題が定位される。すなわち非人間化、エリートの無責任。むろんそれが対自化されるとき、批判的契機としての意義が失なわれることはない。⁽¹¹⁾一方で「比較社会学」を構想したミルズは、そうした自覚的ユートピアンであり、「受苦的存在」で

あった。そして「直接性」へのみなおしは、「現代社会の歴史的位相」の吟味において重要な鍵となることは否定できぬ。⁽¹²⁾彼の誇張にみちた、しかし純粋な批判性、その「啓蒙の弁証法」の意義を無とすることはできない。けれどもまたそれが内向・固定化・実体化されるとき、はたして媒介の契機は見失なわれる。ライト・ミルズはたしかに悲劇的存在であった。

以上の分析をまとめておこう。――(1)(2)の論理とも、一面的に固定化される場合、社会問題を一定の立脚点において解消ないし抽象化してしまう可能性を含んでいた。その意味でこれらは主観的定位の論理である。そこで客観主義を貫徹しようとする場合、立脚点を社会問題の解明・解決にもとめる以外にはない。すなわち社会問題を歴史の形成・展開過程の中におき、媒介契機として定位することである。但しそれを、社会システムの機能要件充足不適合とあらわすか、社会の構造的矛盾とあらわすかについてはここでは保留する。ともかくもこうした論理の展開は「問題が方法を決定する」というミルズのプラグマティズム、すなわち方法論的禁制のアンチテーゼとしてのプロブレマティックの論理の継承・発展を意味するように思われる。

それではこの展開において(1)(2)はいかなる契機となるのか。社会問題の決定因子たる価値、その制度化・内面化への接近に重要な一步がそこに見出される。すなわち(1)の論理はこの問題に対する分析的接近の可能性を与えるものであり、(2)の論理には一方で(1)の独我論的性向を克服する可能性が内包されていた。これらはある社会問題の具体的総体を把握するためのレアルな契機をなす。他方(2)の論理が、対自的ユートピア論として徹底される場合、そのためのイデアールな契機をなすものであるということができよう。要するに(1)(2)の論理は社会問題の認識・対処において、科学・計画および理想・構想という重要な二契機をなすとみなされる。

E・ベッカーはミルズを評して“ideal-real social scientist”と言っている。⁽¹³⁾またミルズ自身“IBM+reality+humanism=sociology”という定式化を行なっている。⁽¹⁴⁾ここからもわかるように彼は IBM に代表される分析的アプローチをけって捨て去るわけではない。しかしまた彼の社会的リアリズムは分析的なそれに尽くされるものではなかった。最後に彼の方法論、「社会学的想像力」を、これとのかかわりで吟味してみることにしよう。

(注)

- (1) Bell, D. *The End of Ideology—on the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties* 1960
- (2) 高橋徹「現代アメリカ知識人」大橋健三郎編『総合研究アメリカ⑥思想と文化』1976
- (3) Parsons, T. *The Structure of Social Action* 1937
- (4) Alexander, J.C. “Formal and Substantive Voluntarism in the Work of Talcott Parsons: A Theoretical Reinterpretation” *American Sociological Review* Vol. 43 1978
- (5) Parsons, T. “On the Concept of Value-Commitments” *Sociological Inquiry* Vol. 38 No. 2 Spring 1968
- (6) Parsons, T. *The Social System* 1951
- (7) S.I. p.p. 25-118
- (8) Mills, C.W. *Character and Social Structure* 1953 (以下 C.S.) p.301
- (9) S.I. p. 38f.
- (10) Parsons, T. 1968 op. cif.
- (11) 見田宗介「ユートピアの理論」徳永恂編『知識社会学』（社会学講座11）1976
- (12) 山之内靖『現代社会の歴史的位相』1982他 Schmidt A. *Emanzipatorische Sinnlichkeit: Ludwig Feuerbachs Anthropologische Materialismus* 1973 等参照。
- (13) Becker, E. *The Lost Science of Man* 1971他 Scimecca, J. *The Sociology of C. Wright Mills* 1977 等を参照。
- (14) Mills “IBM Plus Reality Plus Humanism = Sociology” op. cif.

五、生活史分析と社会学的リアリズム

ミルズのスローガン化された方法論、社会学的想像力は、一方で理想主義への傾斜を示すと同時に、他方で新しいリアリズムへの志向をもつものである。ここでは彼自身「最良の著作」⁽¹⁾と評価する『ホワイトカラー』を中心に、この点を吟味・整理し、本稿のまとめとしたい。⁽²⁾—『ホワイトカラー』はまさに彼自身の社会学的想像力を体現するものであった。その背後にはホワイトカラーの父をもつ彼の社会における生の営みがあった。ミルズは言う。「私は10歳の時から『ホワイトカラー』を書いてきた」と。すでにくりかえしのべてきたようにミルズの関心の焦点は戦争、およびそれを招来する近代史形成の論理にあった。そしてミルズは「新しい下層および上層階級のもつ生活様式と生活条件を反映している新中間階級の実態は…全近代社会の象徴であり、その運命を暗示するもの」⁽³⁾であるがゆえにホワイトカラーに注目した。

彼は従来の調査にはあきたらないものをおぼえていた。そしてこの著作を

「かつてないもの」にすべく様々な努力を傾注した。⁽⁴⁾——上でのべた価値観点は、価値内面化の分析を要請する。そしてその発生的分析を志向するとき、はたして個人史が問題となる。ミルズは価値を実現する体系化された役割に注目し、次のように言う。「もしある社会の典型的メンバーの個人史を…完全にあとづけることができれば、社会の役割と制度についても多くのことを学ぶことができよう。なぜなら人^{パーソン}の個人史は、役割の放棄と新しい役割の取得の結果生じる性格の変化から成り立っているからである。」⁽⁵⁾

そしてミルズは次のような四つの個人史の理論を検討した。⁽⁶⁾①オルポートの「機能的自律性に対する横断面的見地」⁽⁷⁾、②フロイトの「幼児期を強調する発生論的見解」、③リバースの「自律的でハイラーキカルな見解」⁽⁸⁾、④ホルの「激動する思春期の理論」⁽⁹⁾。ミルズは一方で①の非歴史性を、他方で②における幼児期の絶対化、およびそれに立脚した機械論的性格論を批判した。そして①②の間である③④をたたき台として、幼児期の相対化と定位をはかり、性格構造の発生的理論を、「過去」「現在」「未来」というひろがりにおいて確立しようとした。ここから彼はさらに社会的フレームワークと性格構造のかかわりに注目していくわけである。

けれどもミルズはけっして「無意識」への配意を欠いていたわけではない。ホワイトカラーの人々の内面にまでふみこんだ研究の必要を彼は痛感していた。その点で従来手法に限界を感じたミルズは新フロイト主義をはじめとする精神分析学の研究に熱中する。しかしまた彼は、⁽¹⁰⁾ヴェントを批判したミードを高く評価したことからわかるように、経験科学への志向をもち、人間の中の一要素を形而上学的前提にすることには批判的であった。ミルズは「有機体」^{オーガニズム}レベルの衝動等をそう定位するフロイトを批判した。⁽¹¹⁾そしてフロム、ホルナイらの新フロイト主義における社会的性格論等を高く評価しつつも、「心的構造」^{サイニク・ストラクチャー}にそうした位置を与える傾向を見出される点において、それも「生物学的形而上学」を脱しきらないものとした。⁽¹²⁾かくしてミルズは性格構造を「有機体」「心的構造」「人」の三つにわけ、その相互関連を、社会的文脈とのかかわりで見てゆこうとする。⁽¹³⁾ミルズは言う。「20世紀中葉のアメリカ社会は以前にもまして心理学的用語で説明されねばならぬ。なぜなら今日我々をとりまく問題の多くが精神医学的なものであるからである。政治・経済状況を、個人の内的・外的生活に対するその意味という観点から説明し、それによりどのようにして

個人がしばしば盲目になったり、虚偽意識をもったりするかを解明することが、今日の社会研究の重要課題の一つである。個人の日常的経験のうねりの中にこそ、近代社会の基本構造は探求されねばならぬ。この枠組の中でホワイトカラーの心理も形成されているに相違ない。⁽¹⁴⁾以上がミルズの社会学的リアリズムの分析的側面である。しかし看過できぬもう一つの側面がある。

ミルズは『ホワイトカラー』執筆にあたり独自の「単純だが多くのあやがもりこまれた」文体を開発しようとしていた。⁽¹⁵⁾そこで重要な契機となったのはバルザックとの出会いである。その『人間喜劇』のリアリズムは、あらゆる階層・職業の人々を生き生きと描き、まさにフランス社会の風俗絵巻を織りなしていた。それはミルズをたちまちに魅了し、彼はそこに「自分」を発見した。「私は言葉に生きる人間だ。私はバルザックだ。」そう彼は言っている。社会学が文学に学ぶところ多大である。そう考えるようになった彼は後に「社会学者としてのバルザック」という講義をしたりしている。⁽¹⁷⁾こうした彼の営為を、シニカルで洗練されたニューヨーク知識人への反発としてだけ見るのは速断のそしりをまぬがれないであろう。⁽¹⁸⁾

エルドリッジはこうしたミルズの文体・語彙を分析した。⁽¹⁹⁾それは次の三点に要約される。第一にセンセーショナルな書出し。彼はミルズの主要著作の冒頭部をひき検討をくわえている。第二に「陽気なロボット」にみられるように、名詞に相反した意味の形容詞をかぶせ多くの造語を行なっていること。すなわちヴェブレン流のオキシモーロンの多用。これらはいずれも読者の注意を喚起するためという。第三に文学的表現の多用。たとえば官僚制をあらわすのに、ウェーバーのそれではなく、バルザックの「ピグミーが発揮する巨大な力」⁽²⁰⁾という言葉をはひいていること等。――以上の分析からもわかるように、ミルズのそうした文体は、機能的合理性の貫徹する社会にあって、問題の批判的対象化をもくろむものであると言える。そこにヴェブレンやマックレーカーズの影を見ることも可能であろう。

しかしまたその営為は、単なる批判のための誇張にとどまるものではない。そこには従来の分析枠ではすくいきれぬホワイトカラーの具体的総体にせまらんとするミルズの志向を見い出すことができる。ルカーチの言う総体性をいかにして把握するか。それはバルザックのリアリズム文学がミルズに提起した重大な問題であることは疑いのないところである。はたしてミルズは言う。「ルカーチの『ヨーロッパリアリズム研究』をアメリカのどの出版者も刊行しなかつ

たことは恥ずべきことだ⁽²¹⁾と。

むろんこうした方向に対する評価には留保が必要である。それ以前に対象の「文学的側面」に対する社会学的分析がどこまで可能なのか、その点を探求しつづけることが必要であろう。本節ではミルズの社会学的リアリズムの分析的側面・文学的側面に検討をくわえてきた。この両側面はミルズが理想とした反省的知性の二側面である。

以上社会問題・生活史分析とのかかわりでミルズ知識社会学に方法論的再検討をくわえてきた。だがこれは理論的な実質的再検討にむけた一歩にすぎない。すくなくとも我々は「職人性」や「社会学的想像力」を単なるスローガンにとどめてはならない。

(注)

- (1) Gillam 1981 op. cit.
- (2) Mills, C.W. "From the Author" *Book Find News* 5. 1951
- (3) W.C. p. xx
- (4) 詳細は Gillam 1981 op. cit. 参照。
- (5) C.S. p. 161 f.
- (6) C.S. p.p. 139-162
- (7) Allport. G.W. *Psychological Interpretation* 1937
- (8) Rivers, W.H.R. *Psychology and Ethnology* 1926
- (9) Hall, G.S. *Adolescence* 1904
- (10) Mills, C.W. "Situated Action" op. cit.
- (11) C.S. p. 112 f. f.
- (12) C.S. p. 113および Mills "The Barricade and the Bedroom" *Politics* Oct. 1945のP. グッドマン批判も参照。
- (13) 以上枠組の詳細な検討については稿をあらためたい。
- (14) W.C. p. xx
- (15) 書簡 Mills to Parents, 18. Decem. 1946 (Gillam 1981 op. cit. NB. 14)
- (16) 書簡 Mills to Ruth Harper Mills n. d. 1953 (ibid N. B. 16.)
- (17) Gillam 1981
- (18) Swados, H. "C.Wright Mills: A Personal Memoir" *Dissent* 10 (Winter) 1963
- (19) Eldridge 1983 op. cit. p. 41 f.
- (20) W.C. p. 91
- (21) Mills "IBM Plus Reality Plus Humanism = Sociology" op. cit. ルカーチのこの著作でバルザックに多くのスペースがさかされていることは周知のとおり。Lukacs, G *Studies in European Realism*. 1950

<付 記>

本稿は1982年度日本社会学会大会で筆者が行なった報告「社会学的想像力と知識社会学」をもとに、そこでのコメント等をふまえ、後半部（三，四，五，）を大幅に書きかえたものである。

（筆者の住所：〒231 横浜市中区宮川町2-44）